

# MEETING REPORT

## Keystone Symposia <核内受容体>に参加して

先端医療研究センター 免疫病態分野  
大内田 理佳

私は4月13日から19日まで、アメリカのユタ州スノーバードで開催されたKeystone Symposia <核内受容体(NR)>のミーティングに参加しました。Keystone Symposiaは生物学、医学、農学などの多分野にわたる最もクオリティーの高い国際学会のひとつとして知られています。毎年およそ40余りのミーティングが、それぞれ3～5日間という期間で行なわれ、1つのミーティングにつき平均250人くらいが参加しているそうです。Keystone Symposiaの特徴は、話し合いや情報交換を円滑に進められるようなリラックスした環境を提供するために、街から離れた郊外のリゾート地で行なわれることが多い点です。スノーバードもソルトレイクシティから車で約1時間のスキーリゾート地で、4月でも大雪が降っていました。

私の参加したNRのミーティングは隔年で行なわれており、NR研究をリードする研究者らが集まり、今年は特にNRの構造・機能調節機構の解析、あるいは発生工学的解析から得られた最新の情報が提示されました。近年のNR研究は結晶構造解析を中心としたものになってきており、その重要性を頭と肌で理解させられました。期間中は、午前にはNR分野における第一線研究者らによる講演が、午後には若手研究者らによるHot Topicsが、すべて1つの会場で発表され、活発な議論が展開されました。夜はポスターセッションが行なわれ、サンドウィッチなどの軽食をのせた皿を片手に、アル



ポスター会場にて元同僚達と(中央本人)。

コールをもう片手に、抄録を小脇に抱えて、会場を歩き回りました。私自身の研究成果も、ポスターセッションにおいて発表する機会を与えられました。多くの研究者が、私の研究に興味を持って知っていることを知り、また熱心に意見交換できたことは、非常に刺激的であり、私にとってかけがえのない経験となりました。

また、今回は私にとって初の国際学会であるとともに初の海外経験であったため、英語によるコミュニケーションへの不安がありました。しかし、積極的に質問したり自分の言葉に置き換えて聞き返したりすることで、理解し伝える事ができたという自信も、今後の研究生活にとって貴重な財産になると感じられました。



スキー場で見えた雪だるま、日本のスタイルとは違うことにも小さな感動でした。

編集後記



今回は御子柴先生の紫綬褒章を記念して脳神経系をテーマといたしました。また、経理系や病院からも活動紹介記事をいただきました。お忙しい中、原稿執筆をお引きうけ下さった各位には、心から感謝いたします。

また、本紙についてのご意見やご投稿を歓迎いたします。

ご意見や原稿は、広報・情報処理委員会または庶務係までお寄せください。

第20号編集担当 清水 哲男